

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2026年2月 NO.242

[もくじ]

- 2～3 文化施設のサステナビリティー ～文化政策ラウンドテーブル高知の設立～…楠瀬慶太
- 4～5 高知ポップス・オーケストラの歩み ージャンルを超えて、地域に響くオーケストラ文化をー…目代美和
- 6～7 紫陽花によせて＊上＊ シーボルト&おたきさん…上野智子
- 8～9 読み終わらなくていい本もあるのかもしれない…山中由貴
- 10 二度目の最先端…上岡真土
- 11 「アンテナ」M-1グランプリへの挑戦…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団10～11月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「ゆきだるまづくり」上岡みら

公益財団法人高知市文化振興事業団

文化施設のサステナビリティ 文化政策ラウンドテーブル高知の設立

楠瀬 慶太

昨年（二〇二五年）は高知県内の文化施設のサステナビリティ（持続可能性）を考える上で、タニンギポイントとなる一年でした。本県ではここ数年、歴史博物館や科学館の開館、植物園の盛況など文化施設が注目されてきました。

一方で、多くの文化施設は三〇年以上が経過し、設備の老朽化や収蔵庫の維持、集客数・予算確保などが課題となっています。近年では、奈良県立民俗博物館が収蔵品整理などを理由に展示室を公開中止とするなど、文化施設の持続可能性を真剣に考えなければいけない時代になっています。

契機となったのは昨年の県議会六月定例会。高知県は年間利用者

が五万人を超える県立五施設（美術館、坂本龍馬記念館、牧野植物園、高知城歴史博物館、のいち動物公園）を県の「直指定」から民間事業者を含めた公募に切り替える方針を示しました。さらに、五施設を運営する外郭団体を「自律性向上団体」と位置付け、剰余金の返納免除や県の職員給与への関与中止、常勤役員の公募要請などの運営改革が求められました。

民間の活力で自治体の経営改善を図るために始まった指定管理者制度は本県でも二〇〇四年度から実施されていますが、高知県は貴重な歴史資料を扱う専門性や継続性などの観点から「直指定」という形で、五年ごとに審査は受けま

すが、県文化財団などの外郭団体に施設運営を継続して任せてきました。これが民間事業者を含めた公募になると、職員は五年に一回、雇い主が変わるかもしれないという雇用不安が発生するわけで、この点が特に注目を浴びました。

改革案について県が募集したパブリックコメントには、三〇一の個人・団体から七九四件の意見が寄せられました。個人・団体の内訳は、県内一六七、県外一一八、不明一六で、直接本県とは関係のない全国の文化関係者からも多くの意見が寄せられ、職員の雇用不安や県の文化政策の在り方について広く意見が集まりました（文化政策ラウンドテーブル高知調べ）。

この前後には、浜田省司知事の説明や軌道修正、多くのマスコミの検証報道がありました。二〇二五年度に公募対象となる高知城歴史博物館の設置管理条例改正案など関連議案は、県議会九月定例会で賛成多数で可決されています。

この間、新聞記者として文化行政の取材に長く関わってきた私や県内の文化関係者のもとにも、県外から公募問題についてたくさんの助言や意見が寄せられました。他県施設の運営に関する実例を耳にするうちに、高知県は「豊富な文化資源を活かした今後の文化政策についてどのように考えているのだろう」と疑問に思うとともに、自分たちは「文化施設の長期的なビジョンや高知の文化政策について真剣に考えたことがあったかどうか」という自省の念もわいてきました。当初は雇用問題や文化で収益を上げるといった知事の発言に注目が集まりましたが、関係者の間では、施設設置者である行政や文化施設の職員、研究者、市民も含めて、広い視点で施設の持続可

能性や文化政策の未来を考える場が必要だという声が徐々に起きていました。

文化政策ランドテーブル高知は、こうした声を受け、県内外の文化関係者が中心となり、約三五人のメンバーで昨年九月に結成されました。慶應義塾大学准教授の福島幸宏さんと私が共同代表、世話役をひまわり乳業の吉澤文治郎さん、東京大学教授の小林真理さん、東京都立大学大学院生の吉澤林助さんが務めています。設立までの二カ月間、ウエブ会議や会合を複数回重ね、活動方針や企画を練り、現在も継続的に勉強会が続いています。会の名称は、特定の人の会合でなく、円卓の席はいつも空いていて文化政策に関心のある誰もが参加できるという意味で、「ラウンドテーブル」という名称を採用しました。

各施設の職員や学芸員が、館を越えて施設の在り方や文化政策について議論する機会は多くはありませんでした。議論の積み重ねや県外の方々から得られる知見が、

施設運営や文化政策の拡充には欠かせないと考え、昨年九月にオンラインの設立報告会、一〇月には高知市で一般公開の設立記念シンポジウム「文化政策と文化施設のいま」を開催しました。シンポでは、全国の文化施設の運営評価に関わる小林さんが「近年の地方自治体設置の文化施設を取り巻く状況」と題して基調講演し、日本博物館協会専務理事の半田昌之さんから県内外の六人と文化施設の持続性について意見を交わしました（写真）。



オンライン含めて約160人が参加したシンポジウム

ラウンドテーブル高知では、県内外の最新の知見を学ぶシンポジウムや講演会を今後も開催していきます。本年三月には、昨年の設立報告会・設立記念シンポジウムの内容をまとめた記録集を刊行します。また、二月七日には文化庁で博物館政策を担当する中尾智行氏を講師にオンライン講演会「博物館は何のために存在するのか？」を開催します（詳細はラウンドテーブル高知のホームページを参照）。さらに二〇二七年度に改訂される今後一〇年の県の文化政策の指針となる「高知県文化芸術振興ビジョン」についても、検証や改訂の提言を行っていく予定です。県振興ビジョンには、「文化や芸術は、人の心を豊かにし、また、生まれ育った地域に誇りを持ち、社会を変えていく力の源泉であるとともに、前を向いて歩いていくためのエンジンであり、燃料でもあります」と記しています。サステナビリティーとは、環境・社会・経済などが将来にわたって適切に維持・保全され、発展できるこ

とです。持続可能性を見出すには、まずは館のマネジメントや働き方、地域や調査研究との向き合い方など、設置者や運営者、来館者らが客観的に文化施設の在り方を検証してみる必要があると感じています。

私も高校生の時に博物館を訪れ、歴史の探求という夢を抱き、文化に心動かされた一人です。文化芸術の支援拠点となる文化施設が発展していったほしい。多くの県民の皆様は、ラウンドテーブルの議論の場を通して、お知恵をお貸し頂けましたら幸いです。

くすのせ けいた

一九八四年香美市生まれ。専門は日本村落史。高知新聞記者を経て二〇二五年から高知工業高等専門学校准教授。文化政策ラウンドテーブル高知共同代表、高知地域資料ネットワーク事務局・会計。

高知ポップス・オーケストラの歩み ―ジャンルを超えて、地域に響くオーケストラ文化を―

目代 美和

私たち「高知ポップス・オーケストラ」は創設から二十五年という節目を迎える。歩んできた年月を振り返ると、音楽そのものだけでなく、人と人とのつながり、地域との関係の中で育まれてきた歴史であったと、あらためて深く実感する。

「高知ポップス・オーケストラ」は二〇〇〇年に、高知出身の作曲家・利根常昭氏の呼びかけにより、高知県内の有志音楽家らとともに誕生した。長年にわたり中央の第一線で、数々のヒット曲や多彩な音楽制作に携わってきた利根常昭氏が、故郷・高知に戻り、「オーケストラクラシック」という固定観念を超えた新しい音楽のかたちをつくりたい、と声を上げたことがその始まりである。氏と共に集まったのは、県内で活躍する、高い志を抱いた有志音楽家たちだ

った。しかし、予算があるわけもなく、前例のない地方におけるオーケストラ活動である。「本当に続くのだろうか」という不安。演奏家自身も、手探りの状態で第一歩を踏み出したわけである（ちなみに筆者はその頃、まだ駆け出しのパーペーである）。

利根氏と楽団が目指したのは、一部の音楽愛好家のためだけではなく、より広い聴衆に支持され、地元で愛されるオーケストラ。クラシックを基盤に、映画音楽、ポップス、ジャズ、民族音楽、フュージョンなど、多岐にわたるジャンル展開と、幅広いレパートリーを持つ。その柔軟で自由な姿勢は、創設当初から今日に至るまで、楽団の大きな個性となっているわけだが、そのためにはコンサート曲の楽曲を彩る編曲者の存在も欠かせない存在になってくる。

現在、高知ポップス・オーケストラには多くの編曲者が在籍し、楽団のためだけに書き下ろされたアレンジは、唯一無二のサウンドを生み出している。その響きは、今では県内外から多くの支持を集め、演奏会のたびに新たなファンを惹きつけているようだ。それは大きな喜びであるが、その背景には、利根氏の存在が大きい。氏が、運営のノウハウ、そして自身が培ってきた作曲の技法や音楽観を、惜しみなく若い世代に伝え、そうして数多くの演奏家や編曲家を育ててくださった。利根氏による、真摯な後進育成の賜物である。決して表向きに声高に述べることはなかったが、「地域の文化が真に育つには地域の人材を育成してこそである」という、氏の一貫した哲学、強い情熱、信念、地元への深い愛情は脈々とオーケストラの

血脈に流れ、その志は貫かれていた。又、創設から大切にし、支持を得ていることの一つ、楽曲の「親しみやすさ」と「感動」を大切に作る姿勢も、一貫して変わらない楽団の魅力と言われる。ポップスを演奏するからといって、音楽づくりが簡単になるわけではない。むしろ、親しみやすい楽曲だからこそ、演奏の質やアンサンブルの精度が如実に伝わる。私たちはクラシックで培われた基礎的な技術や合奏能力を土台としながら、ポップス特有のリズム感、音色の柔軟さ、歌心をどう表現するかを常に意識してきた。コンサートマスターとして、弓使いやフレージングひとつで音楽の表情が変わる瞬間に立ち会うたび、オーケストラの可能性の広さを実感している。三十年の歩みの中では、数多くの指揮者、ソリスト、客演奏者と共演する機会にも恵まれた。その一つひとつが、私たちの音楽に新たな視点と刺激を与え、多様な音楽観や表現に触れるたびに少しずつ音の幅を広げていった。時に厳しいリハーサルもあったが、どれもが私たちの音楽をより豊かにするための貴重な経験であったと感じている。



そして、忘れてはならないのは、この二十五年の歩みを支えてくださった、多くの方々の存在である。地方オーケストラは、決して演奏家だけで成り立つものではない。会場に足を運んでくださる聴衆はもとより、運営を支えるスタッフ、スポンサーや行政関係者など、多くの支援者の存在があつてこそ成り立つものである。皆さま一人ひとりの支えがあり、楽団は今日まで歩み続けることができた。時には厳しい意見をいただき、それ

を受けて改善を重ね、二十五年という歴史を築くことができたのは、とても貴重な経験だった。終演後、お客様に「初めて生のオーケストラを聴いた」「また来年も楽しみにしている」などの沢山の感想をいただき、その度に自分たちの存在意義を改めて感じたものである。その積み重ねが、今の私たちの音となり、響きとなっている。

振り返ってみると二十五年の歩みは、つくづく、音楽そのものだけでなく、人と人とのつながり、地域との関係の中で育まれてきた、と強く実感する。そうして、「このオーケストラでしかできない音楽がある」という自負の積み重ねが、私たちを前へと突き動かしてくれた。今や国内有数のユニークな楽団として知られる存在となり、高い支持を得るまでになった高知ポップス・オーケストラ。それは地元の多くの皆様が育んでくださったからこそその賜物なのである。私たちの歩みのなかで、定期演奏会だけでなく、地域コンサート、福祉施設での演奏など、地域に寄り添う活動を重ねてきたことも、楽団にとっては大きな財産となった。子ども達の目が輝く瞬間や、年配の方が静かに耳を傾けてくださる姿を目にする度、「この土地

で演奏する意味」を強く意識させられた。生のオーケストラの響きが、誰かの人生の一面面に寄り添うことができたなら、それ以上の喜びはない。

近年、音楽を取り巻く環境は大きく変化している。デジタル化が進み、音楽を手軽に楽しめる時代となった。しかし、どれほど時代が変わっても、生の音楽が人の心を動かす力は変わらないと信じている。このような時代だからこそ、同じ空間で同じ時間を共有し、音が生まれる瞬間に立ち会えるオーケストラの価値は、より一層高まっているのではないだろうか。舞台上で奏でられる一音一音は、その瞬間にしか存在しない、かけがえないものである。

「この土地で、このオーケストラだからこそ奏でられる音がある」「ジャンルを超えて、人と人をつなぎ、地域に響く音楽を奏でる」「ジャンルに根ざしながら音楽の可能性を広げてきた高知ポップス・オーケストラ。私たちは、これからその歩みを止めることなく、高知という地で、新しい響きを求めて進み続けていく。そして次の世代へと、技術や伝統だけで無く、この場所で、私たちらしい音楽を、

地域とともに歩む姿勢を、しっかりと伝えていきたい。二十五年という歴史はゴールではなく、新たな出発点である。

最後に、利根常昭氏への深い感謝と敬意、この楽団に関わってくださった全ての方々への深い感謝を胸に、そして未来への静かな決意を込めて。私たちはこれからも、この土地で、このオーケストラならではの音を奏で続けていく。

「二十五年の歩みに深い感謝を込めて。そして、これからの新たな一音一音に、確かな希望を託して」

もくだい みわ

一九七三年生まれ。

高知ポップス・オーケストラ
コンサートマスター

高知で幼少より音楽やアートに親しんで暮らす。

様々な出逢いに恵まれ、音楽に携わる日々を過ごしています。

た真実の愛に気付いていただろうか。（「長崎新聞」2023/6/12）

どちらもオタクサとスエコザサに触れ、牧野博士の論理不整合を突くが、「日本植物学の父」に向かう、その矛先は鈍い。本誌ではおたきさんを「愛妾」「愛人」と言い、地元紙では「長崎の女性」と言う。私は困惑する。おたきさんはいったいどんな女性だったのだろう。

其扇（楠本たき）（1807-1869）肥前長崎の人。文政六年（1823）シーボルトが長崎に滞在して、最初の三ヶ月ころ、楠本家の若い娘たきを見染める。国法では一般女性の出島出入りは禁じられ、遊女のみであったので、寄合町引田屋卯太郎に相談して手数料を払って、抱え遊女として出島に出入りする。遊女名は「其扇」。このような遊女を「名付遊女」といい、名義だけ引田屋に籍を置いた。四年後の文政十年（1827）五月六日、二人の間に「いね」（イネ）が生まれる。同十二年（1829）シーボルト事件でシーボルトは国外退去。その後駕籠町の和三郎と結婚。万延元年（1859）シーボルトの再来日で、たきは娘いねと共に三十年ぶりに再会。シーボルトの長崎滞在中は、互いに書簡を交わし、また会うなどして絆を深めた。（石山禎一・梶輝行『シーボルト書簡集成』2023/9 八坂書房）

では、どうやってシーボルトはたきを見染めたのか、長崎市公式観光サイト（シーボルト来日200周年記念事業 デジタル展覧会）に答えがあった。

【出島の特例！ シーボルトの外出許可】 商館医の仕事は、商館員の健康管理。出島のシーボルトの元には、最新科学を学ぼうとする医師などが足繁く訪れました。シーボルトは、天然痘の予防接種ワクチン、ペラドンナを用いた白内障手術などの先進医療を惜しげもなく披露し、次第に評判を博します。商館長の協力もあり、医学や諸科学に精通し、教授できる人材として長崎奉行へ紹介されたシーボルトは、ついに出島の外で一般人を診察し、薬草を採取することが許可されます。

【シーボルトの最愛の人 タキ】 1823年8月に来日した27歳のシーボルトは、ほどなく長崎奉行の計らいで、出島の外で日本人を診療する許可を得ました。その最中、シーボルトは患者の一人であった16歳の日本人女性タキに一目に惚れしたと言われています。タキは花街丸山の引田屋に手数料を払って籍だけを置く“名付遊女”になることで出島に出入りすることが叶って、2人はめでたく結ばれました。このときのシーボルトの喜びは、ドイツの家族へ送った手紙にも表れています。

つまり、おたきさんとは長崎の人「楠本たき」、名付遊女名「其扇（そのぎ）」である。少なくとも、地元長崎では、おたきさんをシーボルトの「愛人」、ましてや「愛妾」とは呼んでいないことがわかった。これはよくある地元びいきなのかどうか、詳しく検証してみたい。



（続く）＊中＊ 「愛人」と「愛妾」

＊下＊ オタクサとスエコザサ

うえの さとこ

1952年 長崎県生まれ。

1991年～2017年 高知大学人文学部・人文社会科学部在職、同名誉教授。専門は国語学。

紫陽花によせて*上*

シーボルト & おたきさん

上野 智子

我が家には2匹の猫がいる。大きい方はノルウェージャンフォレストキャット13.5歳の♂、小さい方は尾曲がりの長崎猫5歳（推定）の♀で4年半前どこからか現れ、そのまま家に棲みついた。大猫はバターと生クリームにすぐ反応し、小猫は魚に目がない。2匹の食性向がそれぞれの出自に拠るものかどうかはわからないが、うちの西洋猫と日本猫はとにかく仲よく睦まじい。まるでシーボルトとおたきさんのようだと、勝手に想像を膨らませていた。



と、ある日、そんな幻想をかき消してしまう、本誌No.225「スエコザサの謎」に遭遇する。

日本のアジサイに初めて学名をつけたのはシーボルトである。学名の中に「オタクサ」という単語があった。「オタクサ」とは何か？ 日本の植物学者達にはわからなかった。牧野はその言葉にこだわった。そして調べあげる。シーボルトは長崎で暮らしていた。「オタクサ」は長崎方面のアジサイの地方名かもしれない。そんな仮説も立てた。

ところが予想はずれ、「オタクサ」はシーボルトの愛妾「お滝さん」からきていることが判明する。牧野は憤慨し、学会誌でシーボルトを激しく批判した。〈この清浄な花が、その名前によって汚されている〉〈植物の命名というのは、植物分類学において最も重要な行為である。シーボルトのアジサイのように、その植物と無関係な愛人の名を学名とするような私情をはさんではならない。〉これが当時の牧野の信念だった。妻の名にちなんだ「スエコザサ」という命名行為は明らかにその信念と矛盾している。(2022/5)

何ということか、幻想に浸っている場合ではない。さらに、1年後の新聞記事を見つける。

今年はお島オランダ商館医シーボルトの来日200年になる。(中略)シーボルトは長崎の女性お滝さんを愛した。彼女にちなみアジサイに「ハイドランゲア・オタクサ」と学名を付け、欧州に紹介したのは有名な話だ。オタクサの名がお滝さんに由来していると突き止めたのは「日本植物学の父」と呼ばれる牧野富太郎博士だ。博士は、命名に私情を挟むのは花の神聖を汚す、と強く批判した。自らを「草木の精」と呼び、植物を愛し抜いた博士らしい話だ。そう言いながら牧野博士も亡くなった妻寿衛子をしのび、発見した新種のササに「スエコザサ」と命名しているから面白い。それほど妻を愛していたということだろう。(中略)日本を追放されたシーボルトは、生き別れたお滝さんへの手紙に「いつもお前と(娘の)お稲(いね)の名を呼んでいる」とつぶった。牧野博士は、オタクサの名に込められ

読み終わらなくていい本もあるのかもしれない

山中 由貴

宝物みたいにステキな小説を読
んでしまった。こんな小説なら
ずっとずっと読んでいたい、読み
終わってなんかいい、読み終わ
らなくていい。

それは読売新聞の夕刊で連載さ
れていた作品で、最近子どもが生
まれて子育てに奮闘しているパパ
である、出版社の人からのおす
めの本だった。

戌井昭人さんの『おにたろかっ
ぱ』（中央公論新社）だ。

『おにたろかっぱ』は、三歳の
男の子タロと彼の成長を見守る父
ちゃん、ときどき母ちゃんの日々
を描く、ほんとうにたわいもない、

ゆるゆるとした物語で、なあんに
も事件は起こらない。わたしはス
リル満点の手に汗握る本や謎を解
き明かしていくような本ばかり読
んでいるけれど、そんなわたしも
なぜか虜になってしまって、延々
と読んでしまう。なーんかおもし
ろくてやめられないのだ。

タロと父ちゃんと母ちゃんは、
三浦半島の海辺の町に暮らしてい
る。父ちゃんはかつて一曲だけ
ヒットをとばした売れないミュー
ジシャンで、母ちゃんが稼ぎ頭な
のをいいことにブラブラしている
三歳のタロと父ちゃんは毎朝ラジ
オ体操をして、朝食を食べる。朝
食当番は父ちゃんだ。それから散

歩に出て、パン屋のシキ子さんか
ら芋パンを買ったり、海に行って
漁師小屋に座っている元漁師の竹
蔵さんとお茶を飲んだりする。い
つもタイヤを引きずって筋肉を鍛
えているのぼるくんもいる。

落語を聴いて育ったタロは、
ちゃぶ台の置かれた部屋で「かい
ぎ」をするようになった。ちゃぶ
台の傷のかたちにはいろんなもの
がひそんでいて、そのなかにはオ
ニとカッパがいた。タロにはその
オニとカッパの声が聞こえるの
だ。父ちゃんが壁の節穴から部屋
をのぞいてみると、タロは一人三
役でオニとカッパと「かいぎ」し
ている。タロがあんまりにも楽し

そうなので父ちゃんもついつい参
加したくなり、節穴のある壁の棚
に置いてある牛のぬいぐるみ、「上
田ウシノスケ」になりきって「か
いぎ」に加わるようになるのだが
……。

そんな三人家族と、オニとカッ
パと上田ウシノスケの毎日に、ニ
コニコしてしまう。

なんといつてもタロがいい。

わたしにも子どもがいて、いま
は成人してすっかり育児からは遠
のいてしまったのだが、タロはあ
のころの子どもの、つい笑っちゃ
うようなもの言いや、はっとさせ
られる成長の瞬間をぜんぶもって
いる。ことばをひとつひとつおほ
えて、意思疎通ができるようにな
り、やりたいことやいやなことを
自分のことばで表明する、ちいさ
な一個人。あらあら、いつのまに
かこんなな、ちゃんと「人」になっ
てる……という、奇跡を感じる貴
重な時期を、タロは体現している。
タロの言動がかわいすぎて、もう
メロメロなのだけど、そういえば
うちの子だってませたこと言って

おもしろかったなあとか、妙なこ
だわりがあったたいへんだったな
あとか、そんなのも混じってなん
とも胸がうずくのだ。

そんな、なんでもない日々が続
いていくだけなのかというところ
でもない。父ちゃんはいまのぶら
ぶら生活をなんとかせねばなるま
いと考える。そんなとき、母ちゃ
んが体調を崩し、いちどじっくり
精密検査を受けることになった。

ミュージシャンとしてひとり地
方巡業の旅に出ようとしていた父
ちゃんだったが、母ちゃんをゆっ
くり実家で療養させるため、タロ
をつれての父子ドサまわりツアー
とあいなった。横浜からフェリー
で出発し、門司港、山口、広島、
尾道、倉敷、京都……と、ライブ
をしながら車でめぐっていく旅だ。
それぞれに父ちゃんの音楽仲間が
いて、みなとつてもすてきなキャ
ラクターなのだ。

この、各地を旅していくタロと
父ちゃんの珍道中がまた読ませる。
ほんとうにもうね……いいんで
す……。子どもと旅行にいくと、

要所所でピースサインをさせて
写真を撮って、あとからそのアル
バムを見返したときに、この時は
ああだった、こんなハプニングが
あった、なんてことをじわじわ思
い出して笑い話になったりするも
のだけど、その、写真に撮られな
かったところこそが家族共通のか
けがえのないものののだ。いや、
写真には残っていないからもうい
まとなつては思い出せない、そん
な些細なことが家族というものを
構成するいちばんの要素なのかも
しれない。

この小説には、その些細なこと
がいくつもいくつも溢れている。
オムツじゃないとウンコができな
いタロが、駐車場の物陰でかくれ
てウンコするのをじつと待つ父
ちゃん、しらない大人と顔を合わ
せても物怖じせずに挨拶するタロ
のほんのり緊張の表情、移動疲れ
で不機嫌になって空気のわるくな
る車内、タロがいるからお酒を一
杯でがまんする父ちゃん（いや飲
むんかい）……。

いとおしい。
たとえばあなたに子どもがいな



ければ、三歳の子どものドタバ
タな日常がいちいち新鮮でもし
ろく感じられるだろう。たとえ
わたしのようすでに育児から卒
業した人なら、過去の奮闘をなつ
かしく、よろこばしく思い出す
きっかけになるだろう。そして今
まさにちいさな一個人を相手に毎
日をせわしなく送っているなら、
これほど親しみ深い戦友のような
小説はないだろう。

かんぺきな人間からはほど遠い

ちゃらんぼらんな父ちゃんが、育
児でやってはいけないことをいく
つもやってしまいがちでもタロと
ともにすごす、そのふつーなかん
じが、だれにとつても共感と笑い
と涙をさそうのだ。

旅のあと父ちゃんと母ちゃん
とタロの生活は続いていく。それ
がまた、いとおしい。
読み終わった気がしないのはその
せいかもしれない。

やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。

TSUTAYA 中万々店の書店員
なかしんぶん編集長としてX
やっています。

好きな本について喋るときだけ
饒舌になります。

二度目の最先端

上岡 真土

戦後まもない一九五〇年代、高知市民図書館は日本で唯一ユネスコ共同図書館事業への参加を成し遂げ、日本で最も先進的な図書館活動として評価されていた時代がある――

このたび、当館が一翼を担う取組である「オーテピア高知図書館と高知県図書館振興計画の両輪での推進」がLibrary of the Year 2025の大賞を受賞しました。同賞はNPO法人知的資源イニシアティブが二十年にわたり実施してきた賞で、これからの図書館のあり方を導くような先進的な活動を顕彰するものです。大賞の選出に至るまでに三度にわたる選考が実施され、最終選考は公開の場でそれぞれの活動について発表を行うなど、日本の図書館界では他に類がなく、最も耳目を集める賞となっています。高知県と高知市が「地域を支える情報拠点」として整備したオーテピア高知図書館は、全国で初めて県と市が共同運営する図書館と

して二〇一八年に開館しました。その構想段階では様々な議論があり、立地する高知市だけではない県全体の読書・情報環境の改善を望む声を受けた高知県教育委員会が「高知県図書館振興計画」を策定しました。

県市共同という稀有な運営形態、全国でも屈指の広さと収蔵能力を持つ図書館施設、多種多様で豊富な資料を源に司書が展開する図書館サービス、いずれも象徴（ランドマーク）たる「オーテピア高知図書館」が図書館の可能性を喧伝する一方、県全体の読書・情報環境を改善するための取組を「高知県図書館振興計画」が進めてきたこと。その結果として、県内市町村で新しい図書館の開館や整備予定が相次いでいることなどが評価



最終選考発表チーム
(写真は図書館総合展運営委員会事務局提供)

されました。

この受賞は、日頃から図書館を利用している県民・市民の皆様、県内市町村



オーテピア高知図書館外観

立図書館の皆様をはじめ、関係者・団体の方々の図書館活動へのご理解とご協力の賜物であることは間違いありません。

これからも、人口減少の進行とコミュニティの縮小が予測される時代にあつて、図書館同士がつながり、図書館が地域の学びを支え、情報面でセーフティネットとして機能していくために、当館の図書館資源を継続的に確保し、取組のさらなる発展と県内市町村立図書館との連携を強めていく必要があります。

かつて最先端を走った高知市民図書館の取り組みは、種として東京の多摩地域へ飛び、花が開いて全国へ波及しました。一方、県内では十分な波及を見ることなく、時代が進むにつれ高知市民図書館自身も全国平均の図書館になって

いった歴史を教訓とし、今度こそは県民、市民のために先端を走り続ける覚悟と信念を持って、これからの図書館活動に邁進してまいります。そのためには、県民・市民の皆様からの継続的な応援が不可欠です。これからもオーテピア高知図書館をはじめ、県内の公共図書館の応援を、何卒よろしくお願いします。

(※) 高知市民図書館のユネスコ共同図書館事業への参加経緯などは、高知県電子図書館に掲載している「高知市民図書館70年史」のpp.32-33「4 市民図書館史Ⅱ サービスの拡充(6) ユネスコ協同図書館事業への参加」をぜひご覧ください。こちらは、登録ない方もご自由にご覧いただける資料となっています。

<https://web.library.jp/kochi/g0102/libcontentsinfo/?conid=270203>



かみおか まやこ
一九八五年南国市出身。
オーテピア高知図書館司書。

「アンテナ」

M-1グランプリへの挑戦



下尾 仁

滋賀県で開催されているキモキヤライイベントで仲良くなったボル姉さん（佐賀県で活動しているポルダリングの壁の妖精）が、その年の漫才No.1を決める「M-1グランプリ」に参加した話をしてくれ、「（僕のやっているキモキヤラ）は「はりま」と「やばし」は、喋れて面白いので、是非、M-1グランプリに挑戦してほしい！」とえらく推してきた。

一緒にキモキヤライイベントに参加している、兵庫県福崎町のガジロウもM-1グランプリに挑戦して、一回戦を突破したとのこと。ここだけの話、運営を行政がやっていて、担当職員が上司に言われてイヤイヤ参加したと言っていた。そんなガジロウが一回戦を突破したのであれば、天狗になっている僕らは「イケるのでは？」とM-1グランプリに挑戦することに。参加するまで知らなかったが、北は北海道から、南は沖縄まで十

三県で開催される全五十五回の予選会の中から希望地・希望日を選出し、専用のエントリー用紙に必要事項を記入。事務局に郵送して参加日が決まる。という流れであった。応募してから数日が経ち、一回戦は九月二十四日の水曜日、場所は大阪心斎橋バルコのSPA C E14に決定した。それから漫才などやったことのない僕たちは、「あーでもない、こーでもない」と、無い知恵を振り絞り、一つの漫才みたいなものを作りあげた。予選当日。朝五時に高知を出発。車中でネタを何回も繰り返しながら、目的地を目指した。五月に滋賀であったキモキヤライイベントに行く途中にスピード違反で捕まったので、今回は慎重に、慎重に運転し、無事大阪に到着。着ぐるみを台車に乗せ、いざ！会場へ。到着するなり、一人の女性が「はりまさんとやばしさんですか？」と声をかけてきた。SNSで告知

していたのを見て、応援に来てくれたのだ！ありがたい事である。この日の参加者は一八〇組。僕たちの出番は十番目。その時が来るまでロビーで待機。他のコンビもネタ合わせしている。テレビで見た事のある光景が目の前で行われ、なんだか不思議な感覚を覚えた。着ぐるみを装着し、さあ！いよいよ出番だ！

土佐弁で作ったネタは思った以上にウケ、気持ち良い、あつという間の二分であった。出番が終わったら帰ってもいいとの事だったので会場を出ると、応援に来てくれた女性と別のファンが現れ、十組見た中で一番盛り上がったと言ってくれ、「これは、イケたー！」と思った。結果発表は全組が終了後、その日の夜、ホームページで公表される。せっかく大阪に来たのだから、近くの道頓堀や橋で動画でも撮ろうと、ファンと共に歩いて向かった。橋に着き、沢山の人がいる中で着ぐるみに着替えて撮影をしていると、人混みの中から「はりま」と「やばし」だ！！と僕たちのことを知っている人が！こんな所でも認知されているとは、嬉しすぎるぜ！！いい動画も撮れたので、プチ打ち上げにファンと一緒に食事をし、大阪を後にした。帰りの車の中では、敢

えて2回戦の話はしなかったが、心の中ではイケる気満々であった。大阪への日帰りはさすがに疲れ、その日はぐっすり夢の中。次の日、結果を見ると落選！！天狗の鼻がポッキリ。ガジロウ、君はイヤイヤ参加したのに、凄かったんだ。ごめん…。

それから二ヶ月が経ち、相手の「やばし」の「ゆうやけ君」は「R-1グランプリ」にもチャレンジ見事に落選。でも、挑戦するって大事ですよ！これからも僕たちは色んなことに挑戦する予定です。応援よろしくお願いします。

P. S. M-1グランプリでやったネタを僕の店のイベントで披露した模様が、二〇二六年一月十九日23時から、NHKの「うなぎのぼりLAB」っていう番組でちよっとだけ放送されるとの情報をキヤッチしました。番組を見たあなた！あなたなら僕たちを二回戦に進ませますか？

しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

10～11月の事業から

●共生社会の実現に向けた舞台芸術創造事業●

多田淳之介 演出 「真夏の夜の夢」

採用一年目の私は、今回初めて演劇公演に携わることとなりました。その公演は、「共生社会の実現に向けた舞台芸術創造事業」の一環として、かるぽーとの四国銀行ホールで上演した、演劇公演「真夏の夜の夢」です。

「共生社会」とは、これまで十分に社会参加できるような環境になかった人たちが、積極的に参加できる社会のことです。同事業の三作目となるこの公演では、シェイクスピアの古典戯曲「真夏の夜の夢」を題材に、セリフのないノンバーバル（非言語）表現に挑戦しました。公演の演出を担当したのは、東京デスロックという劇団の主宰である多田淳之介さんです。言葉に頼らず、身体の動きや表情、音楽、空間構成によって物語を立ち上げる手法は、多田さんにとっても初の試みとのことでした。

今回、公募で二十九名の出演者と九名のサポーターが集まりました。出演者の中には、長年演劇活動を続けていた人もいれば、初めて舞台に立つ人、視



覚・聴覚障害のある人、車椅子利用者など、多様な背景をもつ人たちが参加しました。さらに、この事業には衣装や振付など、たくさんの方のスペシャリストが関わっています。今回はその制作に私も参加させていただくことになりました。日常業務でも覚えることが多く、頭の中が熱くなる毎日を送っていた私は、事業担当を伝えられたとき、たくさんの方の経験が身につくだろう期待と知らない世界に飛び込む不安を覚えたことです。

稽古期間は約一ヶ月。一回の稽古時間は二時間半のときもあれば、四時間に及ぶときもあります。担当者はその間にスタッフや出演者の名前、物語の流れや登場人物など、膨大な量の情報を叩き込み、多様な業務をこなさなければなりません。名前と物語の流れは、遅くとも三回目の稽古までには覚えていないと参加者の要望に対応できないと反省しました。短い期間でしたが、稽古を重ねる中で、苦手な部分を補い合いながら一つの作品をつくり上げていく過程そのものが、この事業で私が得た大きな成果となりました。

本番では字幕タブレット、音声ガイド、開演前の舞台説明などの鑑賞支援サービスを実施し、誰もが安心して観劇できる環境整備にも取り組みました。来場者からは、「障害のある方もない方も一緒に

に楽しめる空間が素晴らしい」という声や、「セリフがないのに、感情やストーリーがこんなに伝わってくる舞台は初めて」「観ているうちに、言葉がないことを忘れて引き込まれていた」会場全体が一体になっていて、観客も作品の一部になったような感覚だった」という感想をいただきました。特に、出演者一人ひとりの存在感や、楽しそうに舞台に立つ姿に心を動かされたようです。

この公演を通じて、舞台芸術が特定の人のためのものではなく、さまざまな事情を抱えた人たちが関わり、共に創り、感動を共有できる場であることを観客も出演者も、そしてスタッフも気付くことができたのではないのでしょうか。これからも高知市文化振興事業団では、地域や関係団体と連携しながら、文化芸術を通じて共生社会の実現に向けた取り組みを継続していきます。

会場 高知市文化プラザかるぽーと
四国銀行ホール
日時 二〇二五年十月二十六日（日）
入場者数 四一〇人



高知市文化振興事業団

佐渡裕 指揮

シエナ・ウインド・オーケストラ演奏会 《ブラスの祭典2025》

日本を代表する指揮者・佐渡裕さんと、吹奏楽愛好家から高い人気を誇るプロの吹奏楽団シエナ・ウインド・オーケストラ（以下、シエナ）。この二組がタッグを組み、長年に渡って開催している演奏会「ブラスの祭典」は、日本各地をツアーでまわる大人気企画です。そんな「ブラスの祭典」の高知公演が、十一月十二日（水）、かるぽーとで開催されました。

当日、まずロビーで来場者をお迎えしたのは、シエナのサククスチームによるプレコンサート。サククスならではの軽快でスタイリッシュな演奏に来場者も魅了されていました。

演奏会の第一部は、古典クラシックの名曲、A. リード作曲『オセロ』（第一楽章〜第五楽章）の演奏と、大人気の名物コーナー「音楽のおもちゃ箱」というプログラム。「おもちゃ箱」では、佐渡さんのトークを交え、ポップスや演歌、映画音楽などクラシックとはまた一味ちがう曲を演奏し、来場者にも掛け声や手拍子、足踏みなどで演奏に参加してもらい盛り上がりました。コーナーの最後に演奏した『マンボNo.5』では、佐渡さんやシエナの皆さんが色とりどりのカッパ

をつけて舞台から客席に下り、立ち上がった来場者も一緒になってマンボを踊りながら「ウー、マンボー」と掛け声を出す楽しい演出。会場に一体感が生まれ、来場者は大喜びでした。

休憩をはさんで始まった第二部は、再びクラシックに戻り、J. デーメイ作曲『交響曲第一番 指輪物語』（第一楽章〜第五楽章）が演奏されました。演奏会終



盤のアンコール曲『星条旗よ 永遠なれ』は、これもブラスの祭典ではおなじみで、来場者が自分の楽器を持ちこみ、佐渡さんの指揮のもとシエナの皆さんと舞台上に上って共演できるという一大イベントです。この日のために三時間かけて遠方からやって来たという高校生もいて、演奏前からすでに場内は興奮のつぼ！ 舞台の上に乗りにきれいなぐらい大勢での演奏となり、大盛り上がりの中で幕を閉じました。終演後の来場者アンケートでも「音の迫力の凄さと会場を巻き込んだ演出が素晴らしく、とても楽しかった」「佐渡さんのオーケストラは音楽をとっても身近に感じる。年齢に関係なく皆が楽しめて最高です」など嬉しい感想をたくさんいただきました。

また、演奏会の前日にはシエナのフルートチーム「シエナ・フルーツ」のメンバー四名が、特別養護老人ホーム高知市福寿園を訪問し、入所者とそのご家族に向けてアウトリーチを行いました。誰もが聞いたことのあるクラシックや日本の童謡・唱歌、演歌などが演奏され、入所者の皆さんも思わず口ずさんだり体を揺らすなどして楽しんでくださいました。

会場 高知市文化プラザかるぽーと

四国銀行ホール

日時 二〇二五年十一月十二日（水）

入場者 八八七人



フクちゃん

©横山隆一／横山隆一記念まんが館
(1961年)

アートラクションやゲーム、舞台などの中に、あたかもそこにいるかのように入り込んで体験する「イマーシブ」。同じ催しでも人によって体験することが違い、リピートしても楽しめる摩訶不思議な世界である。そもそもイマーシブとは、「没入感のある」という意味だが、いくら説明を聞いてもあまりよくわからなかったので実際に参加してみた。

東京のお台場では常に開催されていて、私が参加したのは七十分の演劇の中に入り込むものだった。ネタバレしてはいけなかったので、他言しないという同意書にチェックしてから入場する。江戸時代にタイムスリップして演者と話をしたり、危険なシーンの目撃者になったりと、目も口も身体も使った。書けるのはここまで。秘密保持が徹底しているのは、他の文化芸術とは大きく違う。広報がやりにくそうな芸術だが、数年前には予約が取れないほどの人気だったようで、今はむしろ外国人客が増えている状況である。

芸術・文化施設は、展示だけでは人がなかなか集まらないというのは全国的な傾向で、主催者はあの手この手で集客に奔走している。「幼少



風俗歳時記

イマーシブを体験して思ったのは、この芸術には相当なお金がかかっていること。千人、千五百人収容できるホールなら数千円の入場料で採算は取れるだろうが、イマーシブの場合、スペースの広さも体験の内容も充実したものでなくてはならない。それなりに演者の数もある。入場者は一度に二十〜三十人が限界である。入場料は当然高く、ということとは、これを高知に持つてくるのは難しい。体感する機会を持つことは難しいかも知れないが、ミステリーやバーチャルがちょっとしたブームになりつつある昨今、俗世間を忘却するのにイマーシブという手法は捨てがたい。

(立花香)

期から芸術文化を愛する習慣を「学校教育でも芸術に触れる機会を」と行政が旗振りしているものの、すぐに自分の得にならないもの、お金がかかって見返りがあるかどうかかわらないものには財布のひもは固い。時代だ。子どもやお年寄りを入館料無料にして、県内の文化施設は来場者を待っているが、この無料作戦も当たり前になってしまい、有難みも無くなってきたのではないかと思う今日この頃である。

イマーシブを体験して思ったのは、この芸術には相当なお金がかかっていること。千人、千五百人収容できるホールなら数千円の入場料で採算は取れるだろうが、イマーシブの場合、スペースの広さも体験の内容も充実したものでなくてはならない。それなりに演者の数もある。入場者は一度に二十〜三十人が限界である。入場料は当然高く、ということとは、これを高知に持つてくるのは難しい。体感する機会を持つことは難しいかも知れないが、ミステリーやバーチャルがちょっとしたブームになりつつある昨今、俗世間を忘却するのにイマーシブという手法は捨てがたい。

第 78 回高知市展 作陶体験会

高知市展陶芸専門部会では、「作陶体験会」を今年も開催します。
初めての方、大歓迎！ この機会にぜひ、あなたも土に触れてみませんか？

■ 日 時 ■
[制作] 3月22日(日) 10時～16時 ※昼食の用意があります
[素焼き準備] 4月19日(日) 9時30分～12時
[色付け] 5月10日(日) 9時30分～12時

■ 会 場 ■
かるぽーと10階 彫塑・陶芸室

■ 参 加 費 ■
6,000 円 (粘土代および 3 月 22 日の昼食代を含む)
※4kg 以上の粘土を使用する場合は、別途実費精算

■ 持 ち 物 ■
筆記用具、エプロン、雑巾(タオル)
ビニール袋大(45Lのゴミ袋でも可)1 枚、陶芸用工具(お持ちの方)

■ 対 象 ■
16歳以上の方
■ 定 員 ■
先着18名 (申し込みが12名以下のときは中止の場合あり)

■ 申 込 方 法 ■
2月14日(土) 8時30分からお電話または直接かるぽーと 8 階窓口へ
■ お申し込み・お問い合わせ ■
高知市展事務局(公益財団法人高知市文化振興事業団内)
☎088-883-5071 ※8 時 30 分～ 21 時(月曜休館 ※祝日を除く)

風 伯

柿

「こけてケガしても、(私を)よう運ばん」と、すぐストップがかかる。だいが木に残ったが、七十個の柿山ができた。水で洗い、少し見栄えはしたが老木だから器量が悪い。身内の家を回って多数押し付ける。当然父には否応なく連日カッとして差し入れた。父が植えた柿は実家だけではなかった。私の家の、猫の額のシワのような

昨秋は柿が当り年だった。介護施設にいる父が、実家の柿の木が気になって仕方ないらしく、柿の話ばかりする。実家は誰も住んでいない。柿は庭で刈り重ねた、不安定な枝葉の上方にあって、枝切りバサミがうまく使えない。思い切つて庭石に上がり、なんとか届く範囲の柿を採る。娘の監督下で。

庭にも植えた。父の畑仲間頼んで、枝ぶりを低く剪定してもらっているが、実家柿の在庫が多数あり、採果を迷う。そんな折、数十年前通った理髪店で傘寿を前にした店長が、ついに店をたたむと言う。この店長には、歴史の秘話、市井の文化論、政治談議、家の修繕、競馬の解説、騰がる株まで教えてもらった。生粋の土佐人、異骨相だ。父、息子三代がお世話になった。最後の散髪で店長が「柿が好きとボツ」と言った。店長、私の前でそんなこと言う、知りませんよ。退店後、速攻で家の柿を採り、洗いもせず、息せき切って再来店。二〇個押し付ける。お返しに耳かきなどもらい、得する。翌日店長からわざわざ電話がかかってきて「頂いた柿はおいしく、種がでろしく」とうれしそうに言った。

(昌)

第 78 回高知市展 彫刻講習会

5月23日(土)から開催される市展に向けて、3つの彫刻講習会を開催します。初心者大歓迎！ぜひ、この機会にあなたも創作の喜びを味わってみませんか？

■コース

①全身像コース

日 程: 3/3(火)～29(日)の火・土・日、全12日間
時 間: 18:30～20:30
内 容: モデルを使った彫塑像の制作。テラコッタ粘土で作り、素焼きして仕上げます。

参加費: 10,000 円
※モデル代、粘土代込み

②頭像コース

日 程: 3/31(火)～4/26(日)の火・土・日
時 間: 昼 14:00～16:00
夜 18:30～20:30
※開催日による

内 容: モデルを使った彫塑像の制作。粘土で作り、石膏で仕上げます。

参加費: 10,000 円
※モデル代、粘土代込み

③抽象コース

日 程: 4/30(木)・5/1(金)の2日間
時 間: 18:30～20:30
内 容: 立方体のスタイロフォームを使った自由作品の制作。

参加費: 1,000 円 ※材料費込み

■お申し込み

対 象: 16 歳以上の方
定 員: 各コース 10 名

申込方法:

全身像・頭像コース

…はがきで 2 月 13 日(金) 必着

抽象コース

…はがきで 3 月 13 日(金) 必着

記載事項: 郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・生まれ年・電話番号・希望するコースを明記

その他: 定員に余裕がある場合は、締切日翌日 8:30 から電話で受付

■お申し込み・お問い合わせ

☎781-9529 高知市九反田 2 番 1 号
公益財団法人高知市文化振興事業団
高知市展事務局 ☎088-883-5071

今号の表紙

「ゆきだるまづくり」

上岡 みら

2 月といえば節分、冬といえば雪だるまという季節のモチーフを掛け合わせ、小鬼が雪だるま作りを楽しむ、優しく温かい 2 月のワンシーンを描きました。

(かみおか みら／

龍馬デザイン・ビューティ専門学校 1 年生)

こどもから大人まで誰もが楽しめるコンサート♪

かるぽーと こども音楽会

2026年 **3月8日** [日]
開場 13:30 開演 14:00

0歳から入場OK

演奏中の
出入りOK

♪ ディズニーメドレー
♪ 勇気りんりん
～アンパンマンたいそう
♪ かわいいだけじゃだめですか?
♪ となりのトトロ ほか

〓 小さいお子さま連れでも安心のサービス完備 〓

- ベビーカーの預かり
- チャイルドクッションの貸し出し
- ロビーにジョイントマットスペース
- 授乳やおむつ替えスペース
- ホール内に畳鑑賞スペース

高知市文化プラザかるぽーと
〔四国銀行ホール〕 高知市九反田2-1



主催 | 公益財団法人高知市文化振興事業団、高知市文化プラザ共同企業体
お問い合わせ | 公益財団法人高知市文化振興事業団 TEL:088-883-5071
<https://www.kfca.jp/kikaku>

2025年12月19日(金) 販売開始

前売り

500円

当日

700円

※前売券完売の場合、当日券の販売はありません

全席自由

未就学児
入場無料